

月報

<445号>

ケルンボン日本語
キリスト教会

二〇一九年六月三日発行

「56頁」

佐々木良子

かつてフィレンツェのミケランジェロのもとにいた一人の弟子を通して、いのちに関する逸話があります。その弟子は多くの時間と労力を費やして天使を彫り、周りの人々から賞賛されますが、ミケランジェロから出た言葉は意外なものでした。「すべて完璧だが、一つかけている。それはいのちだ」と。どんなに完璧な彫刻でも、そこにいのちがなかったら、すべてが無です。改めていのちが決定的に大切なものであることに気づかされます。

聖書の中では「いのち」という言葉は、一五〇〇回以上出てくると言われています。そこで語られている命とは、医学的な肉体的なことではなく、霊的な命のことです。神の御前に生きているか、死んでいるか。霊的に生きているか、霊的に死んでいるか。私たちに問われている永遠の課題です。主なる神の御心はご自身の御前で私たちが「霊的に生きている」ことです。

エゼキエル書三七章一〜一四節には、預言者エゼキエルが見た「枯れた骨が生き返る」という幻が語られています。枯れた骨に神が霊を吹き込まれたことにより、イスラエルの民が生き返ることができることが記されています。

預言者エゼキエルの時代は、イスラエルの民にとって国の滅亡、バビロン捕囚という深い絶望感の只

中で力を失い、もはや生きる希望もない状況でした。そのような時にエゼキエルは、捕囚の地バビロンから霊に連れて行かれて、幻を見させられました。

「主はわたしに、その周囲を行き巡らせた。見ると、谷の上には非常に多くの骨があり、また見るに、それらは甚だしく枯れていた。」（二節）

この大量の枯れた骨は、絶望しているイスラエルの民の姿を象徴しています。

打ちひしがれて立てなくなっている民に対して神は必ず祖国に帰還できることを示すために、枯れた骨が生身の人間の姿になって生き返る様子をエゼキエルに見せたのです。（六〜一〇節）

しかし、注目すべきことは、復興することを確認させるために見せられたというだけではありません。

「・・・枯れた骨よ、主の言葉を聞け。これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。」（四〜五節）

「霊を吹き込む・生き返る」という言葉が、一節から一四節まで繰り返されています。枯れた骨に「神が与える霊」を吹き込まれたことにより、人が再び命を与えられたことに目を向けることが重要です。人間の命は、神が与える霊を受けなければ生きることができず、霊がなければ肉体はあっても所謂、生きた屍であることを明らかにしています。

創世記において命の根源である霊について記されています。「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」（創世記二章七節）土の塵から造られた人間が「生きる者」となったのは、神がそ

の鼻に「命の息」を吹き入れられたことにより生きる者にされたのです。

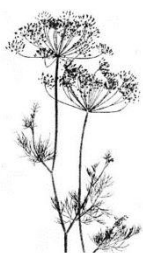
それは、私たちの努力によって得たものではなく、人に命を与えることができるのは、神のみだということ。神は人間に命と息を、生きていくための必要を全て与えてくださったといえます。

人生には不可解なことがたくさんで、現代に生きる私たちは様々なことで混乱し、又、無意味に苦しみ、時には生きた屍同然のように思えることがあります。

しかし、忘れてはなりません。人間の望みが絶えたとき、主に命じられた通りにエゼキエルが預言すると、枯れた骨が人の姿となりました。そして、主の息が吹き入れられたとき、それらが生き返りました。

私たちにも同様に神は新たに生き返ること、命の道を歩むことを可能にしてください。神は人間がご自身の御前に生きていることを切に望んでおられる故に、命の息を吹き入れてくださっているのです。そのように私たちに命を与えられながら、神は御自身の栄光を現わされるのです。

私は先日、教会の方が誘ってくださったさり黙想と祈りのテゼの集会に参加しました。心静かに神さまとの時間を持たせて頂き、自分の心の状態を見つめることができ、神の御前で霊的に生きているだろうか・・・と、問われた気がいたしました。



在独四〇周年を迎えて

外間 久美子

希望と不安の入り混じった複雑な心境でドイツの地に降り立ってから四〇年が経ちました。こんなに長くドイツに滞まることになろうとは一年の遊学のもりで降り立ったあの当時の私には想像もつかなかったことでした。

大学生活、結婚、就職、受洗、離婚、闘病生活、そして定年退職と、友人たちに本が書けるねと言われるほどのいろいろな経験をしました。自分に自信のない塊だった私が、ドイツの地で一人で逞しく生きていけるようになるうとは神様のお守りとお導き以外の何物でもないと思います。そして、その苦しい苦しい経験があったからこそ神様を身近に感じることができ、今の幸せな充実した日々があるのだと確信します。

国際結婚を決意した私を気遣う友人から紹介されたケルンボン教会に行く機会を神様は粋な方法で与えてくださり、一九八八年に受洗しました。傍目からはとても幸せそうに見えた結婚生活は大きな問題を抱え、だれにも言えず一人悩んでいました。信仰があるのに、どうして神様に委ねることができなかつたのか今思うに、たしかに、祈りが足りなかつたと思います。辛い時に言葉が出ず祈れなかつたと言った方がいいのかもしれませんが。辛さだけが先にたつて、神様の存在を忘れていたこともありました。

そして、二六年の結婚生活も破綻し、その結果、ドイツの法律に基づいて、一年の別居期間も入れた二七年間分の私が納入した年金の一部が元夫の年金に組み入れられ、慰謝料(ドイツでは離婚に関して慰謝料はない)もないどころか、彼に三万ユーロ

(三六〇万円相当)を支払わなければいけないという信じられない現状に、怒りと悲しみと不安に打ちのめされました。教友の皆さんに祈られ、支えられ、やっと神様に委ねようと初めて肩の力を抜くことができました。しかし、不当な夫の要求は続き、老後の生活費の心配は重くのしかかったままでした。

そして、ついに私は大病を患ってしまいました。時期を同じくして乳癌と大腸癌の宣告を受けたのです。二〇一四年の六月、私は二つの癌摘出手術を受け、その後抗がん剤と放射線治療を受けました。乳癌の宣告を受けてすべの日曜礼拝の齋藤篤牧師の説教は「復活」がテーマでした。神様が絶対に復活させてくださると私は勇氣と希望を頂き、涙で讚美歌が歌えなかつたことを憶えています。

ただ、その二週間後に大腸癌宣告されたときは、さすがにこれで私の人生も終わりなんだと希望は失せてしまいました。しかし、神様はどん底にいた私をぐいぐいと引き上げてくださったのです。医者も驚くほどの回復ぶり、当初心配されていた二つの手術も三週間半後に無事終えることができました。すでにリンパ管がやられていたので、もし回復が遅く、手術がさらに延期になっていたら転移の危険度が増していたと思います。

家族もなく、外国で一人でどうやって闘病生活を切り抜けていけるのだろうかと不安はとてつもなく大きく押しつぶされそうになりました。しかし、次々と出てくる心配事も、神様は常に助け人を送ってください解消してくださいました。

そして、素晴らしい医者との出会い、見事な副作用のケア、すべてが完璧でした。私の心は感謝の気持ちで満たされていきました。病気になるって、私は時間をかけて懸命に祈るようになりました。そして、

何よりも必要なものは神様が与えてくださるということを何度も何度も経験し、思い悩むことがなくなつたことは大きな恵みでした。二〇一七年秋に軽い心筋梗塞を起こしたのですが、心静かに療養に専念することができました。

昨年一二月、病氣前にあれば心配していた年金生活に入りましたが、神様は素晴らしいプレゼントまで用意してくださいました。私は別居後、今から一〇年前に職場近くに素敵な住まいを見つけました。怒りと悲しみと不安の渦の中にいたときでした。ホームコンサートもできるような広い応接間から屋根裏部屋への大理石のらせん階段のある素敵な明るい部屋は傷ついた私の心をぐだけ癒してくれたことでしょう。

この住まいは神様からのプレゼントに違いないと思っていました。しかし、年金の一部は元夫に取られてしまうので、定年退職したらとても家賃など払えるわけがないと引越しを覚悟していました。家主にそのことを告げたところ、安くしてあげるからここにいなさいとなんと月々二五〇ユーロ(約三万円)も安くしてくださいました。神様は奇跡を起こしてくださいましたと思いませんか。さらにプライベートの生徒達にも恵まれ、おかげで十分に生活ができるようになりました。

しかし、視神経に支障が出て、コンサート活動も諦め、また、運転も諦めました。何をしても時間のかかる不便な生活になってしまいました。教会までも片道二時間弱かかるようになりました。しかし、不思議と私の心は満たされ、辛かつた日々も忘れ、大好きだった室内楽ができなくなった悲しさも忘れ、車のない不便さを不便とも感じず、一日一日を楽しみ、今生かされていることに感謝一杯の気持ちで過ごしています。ハレルヤー！

ミュルハイム家庭集会

神様のおかげでこんなに幸せな毎日・・・自分だけが幸せでいいのだろうか、他の人のために祈るだけがいいのだろうかと思いはじめ、数年経ちました。しかし、毎日の仕事に追われてとても余裕のない日々でした。定年退職したらもっと演奏活動に精出そうという計画も果たせなくなりました。何をしようかと思ったときに、私は聖書に興味を示していた友人たちのことを思い出したのでした。

教会やメアブッシュ家庭集会に誘っても遠ざかることを理由に断られた友人たちでした。もし、私の家で聖書の学びの会を持てば来てくれるかもしれないと声を掛けたら、全員ではないのですが、四人の友人たちが喜んでくれました。佐々木良子牧師にお話したら遠くても来てくださるとお返事を頂き、四月二十八日にミュルハイム家庭集会が誕生しました。ケルンのミュルハイム地区ではなく、教会から北八七〇キロ離れたルール地方にあるミュルハイム市です。

第一回目は自己紹介の後、突然の佐々木牧師の「神様を信じますか？」の質問で始まり、信仰について活発な意見交換ができました。初回にして活気ある学びの会ができたことは感謝でした。

第二回目は日程的にどうしてもメアブッシュ家庭集会の日とかち合ったため、六月八日に合同集会として我が家で行うことになりました。丁度ペンテコステの前日だったので、ペンテコステについて、聖霊に



ついて学ぶことができず。まだ小さな集会ですが、他の友人たちも聖書に興味を持って来てくれることを祈り続けたいと思っています。

二九年ぶりに出席したケルン・ボン日本語教会の礼拝

仙台バプテスト教会会員 石垣慶子

一瞬にして、あの時代に戻ったような、とても不思議な思いと、この教会がどんなにあの頃の私たちが家族の支えの居場所だったのかを改めて思い起こしながらの、感謝の時でした。

今回の訪問は、今の私の支えとしていつも導いてくれているお二人の先輩の同僚の方々とのドイツオランダへの旅の初日の訪問でした。日本キリスト教団山形本町教会の

高橋栄美子さんと、福島県南相馬市原町教会の遠藤美保子さん、お二人とも各教会の付属幼児施設の園長をされています。私たちは、キリスト教保育連盟東北部会の役員をそれぞれ務めています。二〇一一年の東日本大震災以後は、とりわけ福島各施設、また、津波や大地震によって被害を受けたそれぞれの幼児施設とのつながりを持って、ともに祈りあうもの同士として深く交わってきました。震災後、ケルン・ボン日本語教会からは、たくさんのご支援をいただきました。



左より 高橋栄美子姉 遠藤美保子姉 佐々木良子牧師 石垣恵子姉

さて、お二人をお誘いしてのプライベートな旅でしたが、日曜日の早朝ドイツに到着する便でした。

で、「まずは礼拝に行きましょう」とお誘いしました。また、今回の旅は、日本を発つ出発カウンターの手続きの時から、思いもかけないハプニングがあり、それは、本当はこの旅のコーディネーター役である夫、政裕が、予約を間違えてチケットを手配していたために、突然、三人で出発することになったのです。二日遅れでアーヘンで合流するチケットが奇跡的に手に入り、後に、藤井さんご夫妻とアーヘンで、再会することができて、本人もとても喜んでいました。というわけで、いつも旅は夫まかせ、風まかせで歩いてきた私も、今回は、成田でパニックになっていられないと腹を決め、「私が連れて行く！」と宣言して出発したのでした。

成田での出国手続きを終えて、ゲートに向かう窓から大きな虹を見て、強がってはいても本当は心細かった私たち三人は思わず「約束の虹だ！」と唱和していました。そのようなこともあって余計に、教会に着いたときにはなんとも安心したような、とても平和な思いになっていたのだと思います。そして私たちの訪問を、歓迎してください、準備してください、お交わりに加えてくださり、栄美子さんを賛美のリーダーに用いてくださり、私たちはこの旅に神様の計画を確信することができたのです。

一九九一年四月、その半年前にドイツに着任し、もうすっかりケルン・ボン日本語教会に通い始めていた夫に連れられて、私も六歳の息子、三歳の娘と礼拝をまもることができました。アーヘンの住まいは、住宅難の中、夫がやっと見つけたもので、まだリフォームの途中でした。それも同じ研究室の学生さん方の手で行われていたのですが、それだけでなくも不安だらけの私たちにとって、この先のドイツでの生活により一層の不安の影を濃くするものでした。その生活のスタートに、まずは日曜日ごとに教会に行き、そこでは日本語での礼拝、そして豊かな

交わりがあり、夢中になって過ごしたあの一年こそケルン・ボン日本語教会がなくてはならない存在だったのです。『神様のなさることはそのときになつて美しい』『神様はそのときに必要なものをすべて備えてくださる』のみ言葉通りの一年でした。

予定通りに一週間の旅を終え(政裕はまだドイツに残っていましたが・・・)日本に戻ってきたときに、また三人で、「本当に奇跡的な旅だったね!」としみじみと振り返ったのです。そして数日後!美保子さんと栄美子さんから「ケルンの教会からお手紙が届いたの!」と感謝の連絡が入りました。本当に私たちを温かく迎えてくださったことに感謝でいっぱいです。

◇ 予 告 ◇

◇Strassenfest (教会通のバザー)

七月七日(日)

ボン・ハッファー教会との合同礼拝(一五時一分開始)終了後、日本食コーナーを出店してバザーに参加します。

◇「佐々木良子宣教師を支える会」主催

第三回チャリティコンサート 七月六日(土)一四時

小松川教会(東京都江戸川区)にて、佐々木良子牧師を支える日本の支援会の方々が開催してくださいます。自由献金として支える会にお献げいただきます。演奏者はベルリン在住のトランペッター四本喜一氏とオルガニストマーチンラートマン氏です。

◇欧州キリスト者のつどい

七月二五日(木)〜二八日(日)

ルーマニア、クルージュ・ナポカ

◇ 報 告 ◇

◇四月二八日(日)礼拝後、村上淳一郎氏(ケルン放送交響楽団所属)、村上はるかさんによるヴィオラ&ピアノのコンサートが開催され、凡そ五〇名の方々が参加されました。集った方の中でママの子育ての学び会に参加される方も起こされ、教会の存在をお知らせできるよい機会ともなりました。

◇四月より外間久美子姉宅において家庭集会在新しくスタートしました。

◇六月三日(月)外国語教会協議会に佐々木牧師と役員がシュミット亜弥子姉が参加いたしました。

◇六月五日(水)日本基督教団世界宣教委員長・西園路子牧師がベルギー・ブリュッセルに出張の合間、佐々木牧師を訪問くださり共に祈りの時を持ちました。

◇六月一六日(日)毎年恒例の野外礼拝を広島長崎公園にて行いました。子どもの礼拝に集っているお友達と一緒に青空の下、楽しい時を過ごすことができました。



《礼拝》

主日礼拝 毎週日曜日・一四時
大人と子どもの合同賛美礼拝 第四日曜日・一四時
子どもの礼拝 第二日曜日・一二時半

《定例集會》

聖書を学ぶ会 第一・第三水曜日・一〇時 牧師宅
読書会 第四金曜日・一〇時 牧師宅
ケルン集會 第二木曜日・一一時
メーアブッシュ集會 第一・土曜日・一四時三〇分 シュミット亜弥子姉宅
ミュールハイム集會 第四・土曜日 一四時三〇分 藤井隼人兄・弘子姉宅
ママの子育ての学び会 第二月曜日・一三時 外間久美子姉宅
第二月曜日・一三時 牧師宅

編集後記

先日、ホルンダー(Holender)の花摘みに、近くの森へ連れて行っていただきました。可愛い香りのよい小さな花を夢中で採りました。幼い頃、父が休みにになると「どこに行こうか」と私に尋ねると、いつも「お花摘み!」と答えていたそうです。昔懐かしい記憶がよみがえった日でもありました。これから暑くなって、冷たい炭酸水で割って飲む日を楽しみにしています。 佐々木良子

発行:ケルン・ボン日本語キリスト教会役員会
Japanische Evangelische Gemeinde
Köln-Bonn e.V.

<主日共同礼拝>

会場: Dietrich-Bonhoeffer-Kirche
住所: An der Decksteiner Mühle 1
50935 Köln (Lindenthal), Germany
電話: 0221-4300319 (礼拝前後のみ)
時刻: 毎週日曜日 14:00-15:00

<牧師> 佐々木良子 (Pfr' Ryoko SASAKI)

牧師館: Breslauer Str. 26, 50858 Köln
固定電話: 02234-9298792
携帯電話: 0151-2910 6278
Email: r310130s@yahoo.co.jp

<ホームページ>

http://koelnbonn.jp

<振込口座>

IBAN: DE97 3601 0043 0587 6034 38
BIC: PBNKDEFF